認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記

松　中　完　二

1. はじめに

二十世紀以降の現代言語学は、その形成と発展の多くをフェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure 1857－1913) に負っている。そのため、ソシュールが現代言語学の祖とされるところは、疑いの余地はない。彼が打ち立てた構造主義言語学と称される学問は、哲学や心理学とも結び付き、様々な分野で大きな発展を遂げてきた。そしてソシュールの学説は、我が国において最も敏感に受け入れられ、[1] その主張について様々な賛同や反論を生んだ。そこでの最も大きな反論の一つが、当時の国語学者、時枝誠記 (1900－1967) がその著書、『国語学原論』(1941)[2] の中で展開した「言語過程説」と呼ばれる学説を基にした、時枝によるソシュール学説の批判である。そしてこの批判は、1940 年代から 1970 年代までの長きにわたって、実に多くの言語学者、哲学者達を巻き込んだ一大論争となって言語学界や哲学界を賑わし続けた。我が国におけるソシュール学説の受容と抵抗は、これら一連の論争と共に進展してきたと言えるであろう。そして現在、言語学は二つの大きな潮流がぶつかりあい、パラダイムの変換を目指した理論の淘汰が目覚ましい。二つの潮流とは、ソシュールに端を発する構造主義言語学に根ざす生成理論的言語研究と、ソシュールとは成立基盤を異にする認知言語学に根ざす認知理論的言語研究である。言語研究が更なる成熟期を迎えた現在において、時枝によるソシュール学説の正当性をめぐる批判が言語学の歴史の中に埋もれ、殆ど忘れ去られているような現実を見る時、一抹の不満を払拭し得ない。

本稿では、認知言語学という新たな学問の台頭を迎えた現在において、ソシュールと時枝の両学説を再検討すると共に、言語研究の原点的問題としての視点から、時枝誠記の唱えた「言語過程説」の言語学的な価値について、今一度問い直してみたい。

2. ソシュールの Cours de linguistique générale と『言語学原論』

ソシュールの学説は 1916 年に出された *Cours de linguistique générale*（本稿では以下、原典である *Cours de linguistique générale* を *Cours*、小林英夫 (1903－1978) によるその邦訳『言語学原論』を『原論』、『改訳新版 言語学原論』を『改訳』、『一般言語学講義』を『講義』と略して記す）において集約される。しかし、ソシュールの学説について語る時、我々は非常に複雑な手続きが必要となる。というのも、*Cours* 自体がソシュールの直接の手によるものではないためであ

る。*Cours* は 1907 年、1908－1909 年、1910－1911 年に、ジュネーヴ大学でソシュールが三回にわたって行った一般言語学の講義を聴講した学生達の取ったノートを、シャルル・バイイ (Charles Bally) とアルベール・セシュエ (Albert Sechehaye) がアルベール・リードランジェ (Albert Riedlinger) の協力の元に、再構成、統合して編纂したものである。そのため、同書がソシュール自身の思想をどこまで忠実に再現し得ているか、あるいはどの程度まで編者の解釈が加わっているかという疑問から逃れられないでいる。また編者のバイイとセシュエが、三回にわたる一般言語学の講義のどれにも出席していなかったため、*Cours* の記述の信憑性に対する疑問の声があるのも事実である。[3] しかしいずれにしても、*Cours* が後世の言語学の礎となったことは間違いのない事実であり、そこで述べられた言語に関する様々な思想が後の言語学に与えた影響は余りに大きい。そしてそこでの思想が、洋の東西を問わず、後の言語学者達の言語研究の基盤となっていることも、また覆しようのない事実である。

こうした事実を目にすると、*Cours* に集約された思想の偉大さや有効性の方が、同書にまつわる否定的な見解をはるかに上回って余りある。そのため、ソシュールの学説を検討し得る現存する資料として、*Cours* を基にして、その正しい理解の促進を目指すより他ない。*Cours* が後世に残した言語学的な遺産は、次の五点に集約出来る。

第一に、抽象的な概念であり、ある言語社会の成員に共通して内包され得る根本的な言語形成のための概念を指す langue（ラング［言語］）と、このラングの運用によって実現され得る個々の発話を指す parole（パロール［言］）、更にはラングとパロールから成る言葉による表現・聴取活動全体の活動を成立させる生得的な能力までをも指す langage（ランガージュ［言語活動］）という三つの体系を明確にした上で、言語学の対象を langue に置いたことである。[4] この langue、parole という二分割法は、その後の言語研究の基本的姿勢となり、それはアメリカ構造主義言語学においても形を変えて受け継がれていく。[5] 第二に、言語表象を記号（signe［記号］）として捉え、そこには指すところの資料（signifiant［能記］）、と指されるところの意味内容（signifié［所記］）という、二つの表裏一体の概念を体系立てたことである。[6] 第三に、能記 (signifiant) と所記 (signifié) の間には、何ら必然的な結び付きは存在せず、それは社会的に規定された恣意的なものであるとする、「言語記号の恣意性 (L'arbitraire du signe)」と呼ばれる特質を明らかにした点である。[7] 第四に、言語は相互に織り込まれた要素から入念に作り上げられた構造 (structure) であり、言語内の諸項目は全て、もともと相互に結び付けられたものであるとする。[8] そして第五に、言語が社会的な実存体 (entité concréte) であり、一つの単位 (unité) であると規定する。[9]

その後の言語研究の基盤となったソシュール学説の独創点は、この他にも多く挙げられるが、後に時枝の批判点となったソシュール学説の主要部分は、以上の点である。

3. 時枝誠記の『国語学原論』と「言語過程説」

時枝誠記の学説である「言語過程説」は、その具体的な研究方法[10] はともかく、そうした研

究法を支える基本的原理において、一般的に我が国ではソシュールの学説に対抗するものとして捉えられている。またそうした姿勢は、時枝自身も自ら明言してはばからない。そしてその上で、時枝は *Cours* で述べられたソシュールの研究姿勢に対して、正面からそれを否定する。[11] そして時枝は特に、ソシュール学説におけるラングという概念に対して、疑問を投げかけ、かつそれを否定する。[12] 同じくソシュールが主張した、"言語が実存体 (entité concrète) としての一つの単位 (unité)" であるという主張に対しても、反意を露にする。[13] そして自らの学説が、こうしたソシュールの学説に範を取る、従来の構造主義的な言語研究の在り方に抗するものであることを明言してはばからない。[14] その後、1956 年に時枝は『国語学原論 続篇』を出版する。その中で、時枝は自身の学説である言語過程説の基本的原理を、ソシュール学説に抗するものとして力説する。[15] しかし、時枝学説における批判の鉾先は、単にソシュール学説のみに向いていたのではない。時枝は、その学説を通して、当時の国語学者、橋本進吉 (1882–1944) の国語研究の姿勢がソシュールの学説を踏襲したものである点を指摘する形で、ソシュール学説を無条件に受け入れた感のある当時の言語学界－特にその鉾先は国語学界に向けられていたが－の体質や、ひいては欧米の理論を無条件に受け入れ、それに傾倒してしまう日本人研究者の研究態度に対して警鐘を鳴らしていた部分がある。[16]

4. 論点の考察

時枝が批判の対象として取り上げたソシュールの学説は、小林訳を基にしてなされたものであった。そしてそこでは服部四郎が指摘したように[17]、そもそも langue に「言語」という訳語を当てたことが、時枝の誤認を引き起こした大きな要素であることも否定し得ない事実である。こうした訳語の是非に対して、1973 年には篠沢秀夫が、次のように langue 概念の認識の誤りを指摘する。

> "ソシュールの言語活動（ランガージュ）、言葉（ラング）、ことば（パロール）という三水準を表わす用語は、フランス語に本来ある用法上の区別に、自然に従っていて見事である。［中略］人間一般というと統計学的事象のようだが、体系である、言葉（ラング）の個人的実行面であることば（パロール）が現われるという意味では、言語活動（ランガージュ）という操作概念は必然的に個別的、時空的要素を含んで来るのに注目すべきである。くりかえしていうが、これをソシュールは扱わなかった。しかるに、英語ではラングとランガージュの別をたてることができず、日常的にはいずれもランゲィジであるし、日本語の "言語" も心理的、哲学的側面に逸脱しやす拡がりを持っている。"[18]

筆者自身、本稿の始めに、"彼（ソシュール）が打ち立てた構造主義言語学と称される学問は、哲学や心理学とも結び付き、様々な分野で大きな発展を遂げてきた" と述べたが、こうした langue の概念こそが、ソシュールの学説を言語学のみならず、その他の関連領域と有効に結びつけた一番の要素なのである。事実、言語とは une entité psychique（小林英夫訳「心的実存体」）ではなく、話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得る

ものであるとする時枝学説の出発点が、原資料によって示されたソシュールの言語研究の出発点と酷似していることは、疑いようのない事実である。[19] それを裏付けるかのように、後年、*Cours* の訳者である小林英夫は時枝との邂逅を次の様に語っている。

> "かれの有名な言語過程説の解説や批判を今ここでおこなうつもりはない。ただここで明らかにしておきたいことは、それの出産の秘密である。結果においてたとえ消極的であろうとも、右の意味で、かれもまたソシュールの影響下にあることは認めざるをえないところである。[中略] ちなみに言語の成立をもっぱら個人心理学的に考えたところにも、時枝説は少壮文法学派の理論的代表者ヘルマン・パウルに復帰した観がある。" [20]

小林のこの言葉は、時枝とソシュールの研究姿勢が共に同じ土壌にあったことを如実に物語っている。また、磯谷孝は次のように述べている。

> "ラング、パロール、ランガージュの三分法は、先に述べたように、小林氏によって、それぞれ言語、言、言語活動と訳され、この訳語は一応定着した。[中略] 欧米語にはどうやらラング、パロールの二分法に対応するものがあって、たとえば英語では language と speech（実際、A. ガーディナーがその区分を用いている）、ドイツ語では Sprache と Rede、ロシヤ語ではヤズィクとレーチがそれに当たる。[中略] ソシュールのラング、ランガージュ、パロールという三分法は、全くフランス語の自然な発想であり、この発想にもとづいてソシュールはなにはさておいてもラングを研究対象とする言語学を建設しようとした。[中略] 英語では、language と speech という便利な語があり、[中略] これは、一応、ソシュール言語学のラング、パロールに対応している。[中略] ソシュール言語学における、ラング、パロール、ランガージュの三分法が、フランス語の言語構造そのものに負っていることはすでに述べたが、マウロの指摘は、ラングの概念そのものが、多分にフランス語そのもの（というよりも、ひょっとしたら、冠詞と、数という文法的カテゴリーをもつインド・ヨーロッパ語そのものの）構造に負っていることを明らかにする。言語 langue は、フランス語では… langue、une langue、la langue、les langues、langues 等の現れ方をする。このうち、la langue は、一方では「この、その言語」、を表わすと同時に、「そもそも言語というもの」といった絶対普遍概念を表わすことができる。つまり、冠詞と数の使い分けによって、任意の単語が普遍概念、個別概念、特称概念を表わしたりすることができるのである。" [21]

事実、磯谷が指摘する通り、ソシュールにおけるラングの概念は、次の三つに分けられる。

一つ目は les langues と複数形で用いられる場合である。それは現存する諸言語の中の、対象となる複数個の言語を指す。[22] 二つ目は la langue と単数形で用いられる場合である。これは les langues から帰納される言語の原理的体系を指している。[23] そして三つ目は、同じく la langue と単数形で用いられる場合であるが、これは最初に見た特定の国語体を指すものでも、二番目

に見た一つの国語体の総体化でもなく、社会や文化総体を一つの体系として捉える人間的認識として用いられる概念である。こうした langue 概念の使用は、主にリードランジェの講義ノートから発見されている。そしてここでの langue 概念の解釈は、丸山圭三郎の解説につながっていく。[24]

こうした翻訳の問題に関しては、*Cours* の訳者である小林英夫自身、次のように語っている。

> "言語と思考との関係の問題は別として、わたしは訳出の仕事のうちに少なくとも国語的必然の問題と、表現的必然の問題と、さいごに翻訳術そのものの問題との三つをかぞえるのである。およそ翻訳をなそうと思えば、この三つの問題にはいやでもぶつからざるをえない。そうしてそのいずれにも言語学者の注意をよぶ権利があるであろう。[中略] かれは原文における A の表現がなにゆえに、かれ自身の国語に移すさいには、それに対応する表現 a をもってせずに b をもってせざるをえなかったかを知っている。かれは原文における A の表現がなにゆえにそれに対応する a をもって移しうるにもかかわらず b をもって移したかを知っている。そうした自覚を多くもつときは、およそ A のごとき表現に遭遇したばあいには、いかにしてそれを自国語に移植すべきかを悟るようになる。" [25]

この言葉を小林自身の *Cours* 翻訳に当てはめて考える時、langue に「言語」という訳語を当てた真意がどこにあるかは、今となっては知る由がない。また、翻訳にまつわる普遍的問題については、すでに *Cours* において、次のようにその原点的示唆が提示されている。

> "Si les mots étaient chargés de représenter des concepts donnés d'avance, ils auraient chacun, d'une langue à l'autre, des correspondants exacts pour le sens; or il n'en est pas ainsi." [26]
> "もし語というものが、あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、それらはいずれも意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである；ところが事実はそうではない。" [27]

この記述を見ると、時枝が自身のソシュール学説批判の拠り所とし、またその批判の発端となった術語の翻訳とその解釈にまつわる全ての問題は *Cours* におけるソシュール学説の記述から始まり、またその解決に通じる示唆も *Cours* においてすでに提示されていたことに気付かされる。このことは、時枝のソシュール学説批判の出発点と帰結点が、全て *Cours* に回帰するものであることを意味している。現代における言語研究は、*Cours* によりその出発点を見、*Cours* に回帰するものであることを見る時、ソシュール学説と *Cours* が現代言語学の礎となり得た理由もそこに見出されるのである。

5. むすび

時枝によるソシュール学説批判は、時枝が小林による翻訳を介してその学説を読み誤ったことに端を発する、極めて特殊かつ複雑な性質を兼ね備えた問題であったとされる。仮に、時

枝がフランス語に通じ、時代的な背景が時枝に原典の *Cours* を読むことを許したとしたら、あるいはまた、丸山圭三郎や大橋保夫らによるソシュール学説における術語の正しい解釈とその真意についての解説が、もう十年早く行われていたならば、果たしてこうした議論自体が存在したかどうか疑わしい。そのためこの議論が日本独特の特殊なものであるとする否定的な見方も存在する。丸山圭三郎自身、この一連の論争の特異性について、かつて次のように述べている。

> "ところで面白いことに、ソシュールに対する誤解ないし批判は、我国における現象と、アメリカのそれと、そしてヨーロッパにおけるものとが、それぞれ三者三様、独特のニュアンスを呈している。日本においては、何よりもまず翻訳自体の問題を無視するわけにはいかない。我国の特殊事情は、『講義』自身というよりは、その翻訳をもとに論争が行われた点にあり、日本においてはソシュール現象そのものが二重だと言うのも、そのような意味からである。"[38]

しかし、私個人の見解として述べれば、時枝のソシュール学説批判が全く見当外れであったとは思えない。そこでは常に「言語とは何か」「その研究方法は如何にあるべきか」という、今日性を持った先進的かつ普遍的な言語学の問題を提示していた。それは同時に、言語研究に従事する者に対して、言語の問題がどこにあり、その研究に臨む姿勢を示してくれるものであった。そしてそれは、言語の研究者が、最終的には常に同様の問題に突き当たることを如実に示していた。

こうした現象は、言語研究の歴史を通じて、そこで言語学者が少なからず似通った視点や発言を繰り返している事実にも見ることが出来る。例えば、服部四郎の"文の意義は、それに含まれる単語の意義素の単なる総計ではなく、それ以上のものである"[29]という記述や丸山圭三郎の"出発すべきは常に全体からであり、全体は個の算術的総和ではない"[30]という指摘は「全体は部分の総和以上のものである」というゲシュタルト心理学の中心的主張に通ずる。同様に時枝が、"言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである"[31]と言う時、それが"Sie selbst ist kein Werk (*Ergon*), sondern eine Thatigkeit (*Energeia*).[32]［言語そのものは出来上がった作品（エルゴン）ではなくて、活動性（エネルゲイア）である］"[33]と言うフンボルトの主張と類似点を見出すことに、何ら驚きを感じない。同時に、時枝の"言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するということである"[34]という主張がイェスペルセンの"The essence of language is human activity[35]［言語の本質は人間の活動である］"[36]という主張と共通するものであることも、何ら不自然に映るものではない。[37]

服部や時枝のこれらの言葉は、構造主義や認知主義といった学問上の枠組みを超えて、言語研究のあり方を、すでに人間主体の認知構造の中で捉えようとする先見的な視点を持ってい

たことを如実に物語っている。その点で、細かい術語やその解釈の上での食い違いはあったとしても、時枝、服部の双方が、最終的には同じ視点で言語の研究に当っており、同じ視点であるが故に、そのアプローチの仕方において互いに反駁しあう議論が成立したと考える方が自然である。科学としての言語学が最終的に目指すものは、言語の説明理論である。近代言語学の最初の百年は、歴史的存在としての言語がその中心的問題とされ、次の五十年では生物学的必然としての言語習得及び言語運用に焦点が当てられた。そこでは、人間の有する言語の知識がどのようなものであり、それがどのように獲得され、使用されるかを文法という名を借りて、客観的に模式化する必要があった。従って、言語知識や言語獲得の問題と、言語の使用やそれを基にしたコミュニケーションの問題とその解明は、言語学における最初にして最後の究極的課題である。ソシュールの学説も時枝の学説も、その解明に腐心していた点では共通点を持つ。

こうした認識が更に発展、成熟し、言語と認知という視点から言語現象の解明を目指したものが、80 年代から台頭してきた、所謂「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」と呼ばれる言語学である。認知言語学は、言語が人間の認知機構と深い関わりを持つという立場を取る性質上、特に心理学的な概念をその基本に置き、とりわけ知覚心理学や認知心理学との関わりが深い。認知言語学の特徴は、言語と認知に関する哲学、心理学等の関連分野の研究成果を取り込み、人間の現実の活動における広範で多様な言語現象に対する理論体系を構築しようとする点にある。[38] 認知言語学のこうした基本姿勢を見ると、時枝の“言語過程説は、言語において、人間を取り戻そうとするのである。言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するということである”[39] という言葉が、なおさら鮮明に、今日的な意義と深みを持って思い起こされるのである。そしてそこに、今日の言語研究の成熟を支える源流を見るのである。

注

1) 我が国に*Cours*の存在が始めて紹介されたのは、神保格の『言語学概論』(岩波書店、1922:354)によってである。その後 1928 年に、同書は小林英夫によって『言語学原論』(岡書院、その後、1940 年に岩波書店からその改訳新版として『言語学原論』が再版、更にその後 1972 年に、その改版として岩波書店から『一般言語学講義』の題名で再版された)として邦訳が出されている(また小林訳の他に、1971 年には勁草書房から山内喜美夫訳の『ソシュール言語学序説』も出されている)。同書のドイツ語訳が出版されたのが 1931 年、次いでロシア語訳が出版されたのが 1933 年、更にスペイン語訳が出版されたのが 1945 年、最後に英訳が出版されたのは更に遅く、1959 年であったことを考えれば、世界に先駆けて、1928 年という早い時期に日本語訳が出版されたのは驚異的である。

2) 我が国におけるソシュール学説の受容に抗し、ソシュールを批判の対象とすることで皮肉にもソシュール学説を一層有名にしたのが、時枝誠記の「言語過程説」である。時枝の言語過程説はソシュールの言語学説に対抗する学説として位置付けられている。また時枝の学説を収めた『国語学原論』も、その題名から明らかなように、*Cours*(1940 年代当時の小林英夫の邦訳題名『言語学原論』)に対置すべきものとして書かれている。

3) *Cours* は、そこでの記述や用語に統一性が見られにくく、それが *Cours* の解釈をめぐって様々な論を引き起こす一つの要因となってきた。そのため、*Cours* に出てくる術語を基にした議論や、その正当な解釈をめぐる議論は、全てソシュールの言葉であろうという極めて脆弱な仮定の上で成されていたことになる。しかし *Cours* がソシュールの手によるものではないことが明かであっても、当時はそれでも時代的な制約と現存する資料の少なさという点から、そのような仮定の上に立った議論で不都合はなかった。しかも我が国でのソシュール学説の解釈の特異性は、その多くが原典ではなく小林訳という翻訳を介した上で、そこでの術語をめぐる議論であったことが少なくない。その点で言えば、一連の時枝によるソシュール学説批判は *Cours* をめぐってというよりも、むしろ『原論』における術語をめぐってなされた部分が強い。

4) *Cours*、1916 年、25-33頁、ならびに 317 頁。

5) 例えば、ソシュールのラング、パロールという体系をチョムスキーは linguistic competence(言語能力)と linguistic performance(言語運用)という術語を用いて規定する。「言語能力」とは、話者が無意識に言語体系を統御する総体を指し、「言語運用」とは話者の実際上の言語の使用と定義付けられる。これがソシュールのラング、パロールのチョムスキー版であることは、チョムスキー自身が認めるところである (Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax.* Cambridge、1965 年、3-4 頁) 。しかしながらソシュールにとって、ラングは、いわば社会的習慣である。従ってソシュールは、言語の体系を様々な社会的制度の体系と並行的に考える。ソシュールにとって、ラングとしての言語とは文化的・社会的な現象に他ならないのである。一方、これに対してチョムスキーの「言語能力」は、ある一つの言語共同体の成員が同一の言語を共有し得るのは、生得的に人間には言語を習得するための能力が備わっているためであるとする。人間は、この生得的な言語習得能力を用いて、自分が成員として置かれた言語共同体の言語を習得する。言語習得能力は基本的には全ての人間に共通した能力であり、同じ言語共同体に置かれた人間は、それ故に、それが誰であれ、同じようにその言語共同体の言語を習得することが可能である。これが、言語共同体において言語が習得、共有される体系であるとする。この点について丸山圭三郎は、ソシュールの

「ラング」、「パロール」概念とチョムスキーの「言語能力」「言語運用」概念が決して同質のものではないことを次のように指摘する。

"また、チョムスキー (N.Chomsky) の《言語能力 competence》という概念をひきあいに出して、これがソシュールのラングにあたると説明する向きも少なくないが、この二つの概念が重なり合うことは決してない。ランガージュは潜在的能力、ラングはこれが社会的に顕在化した構造であり、構造という言葉はラングにしかあてはまらず、ランガージュは《構造》ではなく《構造化する能力》なのである。(丸山圭三郎編『ソシュール小辞典』大修館書店、1985 年、65 頁)"

チョムスキーのラングに対する見解は、ソシュール学説の正しい理解の上に立っていたとは考えにくい。チョムスキーの言語理論の下敷きになっているのは、決してソシュールの学説ではなく、デカルトとフンボルトの学説である。事実、チョムスキー自身、己の唱える生成文法がデカルトの学説から出て、フンボルト的な要素を持つものであることを、多くの書において頻繁に明言している。そのような現実は、E. Haugen (*Directions in modern linguistics.* in Bernard Bloch Ed.Language, 27、Kraus Reprint Corporation. New York. 1951 年、211 頁) によるアメリカ構造言語学界におけるソシュール学説軽視の批判を引き起こす。そしてこうした批判は Haugen のみに止まらず、Mounin をして次のような辛辣なアメリカ構造主義言語学の体制批判へとつながっていく。そしてこの批判内容が真実だとすると、Mounin (*Saussure ou le structuraliste sans le savoir.* Seghers. 1968 年、76 頁［福井芳男・伊藤晃・丸山圭三郎 共訳『ソシュール』大修館書店、1970 年、99 頁］/Mounin, George. *Introduction à la sèmiologie.* Bernard-Palissy, Paris. 1970 年、57 頁［福井芳男・伊藤晃・丸山圭三郎共訳『記号学入門』大修館書店、1973 年、69 頁］) の言葉にも見られるように、*Cours* の英訳が最も遅かったという歴史的事実も理解に難くない。

6) *Cours*、1916 年、99-103 頁。

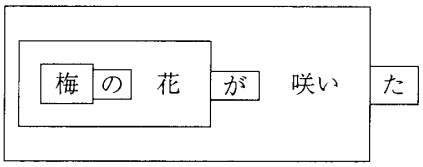
7) 同書、100 頁。

8) 同書、98-145 頁。

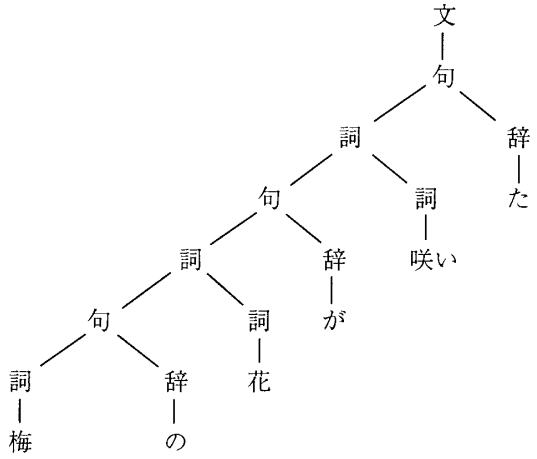
9) 同書、99-145 頁。

10) 言語過程説は、その性質を、本稿で問題としているような、言語一般に対する研究姿勢を説いた基本原理と、具体的にそれを日本語の分析に適用した文法理論（言語過程説の中でもそうした文法理論の部分は、以下「時枝文法」と表す)の二つに大別出来る。時枝文法は、それまで日本語の中心的文法理論であったソシュールに範を取る橋本文法に抗する形で打ち立てられた文法理論である。

単独で文節をなすものを「詞」、常に他の語に伴ってそれと一緒に文節を作るものを「辞」と呼んだ橋本文法を受け継いだ、いわゆる学校文法では、単独で文節を構成し得るものを「自立語」、常に自立語に伴って文節を構成するものを「付属語」と呼んで品詞の二大分類を行う。しかし時枝文法では、橋本文法に見られるような形態論的な視点とは異なった視点から「詞」と「辞」を分類する。すなわち時枝は、本居宣長、鈴木朗といった江戸時代以来の国語学者の訴えた「詞」と「辞」の用法に立ち返り、語の表現過程そのものに「詞」と「辞」という分類基準を求めたのである。そして時枝は、文の構成を「詞」＋「辞」の再帰的な構成として捉える。この文構造を時枝自身は"入子型構造"と呼び、次の図（時枝誠記『日本文法 口語篇』岩波書店、1950 年、250 頁）の様にその構造を表わす。



そしてこれを基に、「梅の花が咲いた」という文を句構造に基づいて分析すると、次の句構造が得られる。



この解析法を見ると、時枝文法は驚くほどチョムスキーの生成文法の文解析の構造に似ていることが分かる。時枝の文法理論がチョムスキーの生成文法的な性質に通じるものであるという指摘は、すでに井上和子や原田信一、水谷静夫、郡司隆男の言葉にも見られる。井上は、

> “このようにして成分構造を記述することは、言語学では目新しいことではなく、直接構成要素分析と呼ばれ、統合論（シンタックス）では欠かせないものとして広く用いられて来た。日本の文法学でも、時枝博士の入子型構造、橋本博士の連文節の考えも、この種の分析法である。(井上和子「チョムスキーの言語理論と日本語の文法」『ことばの宇宙』第 1 巻、第 3 号、ラボ教育センター、1966 年、128 頁)”

と指摘する。一方原田は、

> “このように、時枝文法は単純な句構造文法ではなく、むしろ素朴な形ではあるが変換文法の一変種とみなすことができる。[中略] 入子型構造形式とは、いわば文の深層構造と表層構造を同時に表示しようとしたものであったと言える。この点で、時枝文法はタグミミックスと共通しているように思われる。[中略] たとえば単語の過程的構造を論ずる箇所（『国語学原論』二二二頁以下)は生成文法における語彙挿入（もしくは、グルーバー風に言えば「語彙附着」）の問題と一脈通ずるところがある。[中略] 大まかに言えば、時枝文法は初期の生成（変換）文法に似ているが、随所に述べたように、それを超越している点が多い。(原田信一「時枝文法と生成文法」『英語文学世界』3 月号第 4 巻、第 12 号、英潮社、1970 年、32-33 頁)”

と賞賛する。他方水谷は、

> “洋文典の影響を受けるより前、江戸時代の国語学者の間に別種の文法研究が在った。こちらを承けたのが、富士谷成章流の山田文典、宣長・朗流の時枝文典である。本章で意図する所はその山田・時枝両説の統合発展である。[中略] 筆者は何も、国文法を説くのに泰西の理

論を使うなと主張する者ではない。言語であるからには似寄りも在ろう。事実、成章『かざし抄』に見る語類の設け方は《parts of speech》の考えに近いし、本居春庭『詞の通路』が見せた構文解析法には従属文法 (dependency grammar) が似ている。(水谷静夫「国文法素描」水谷静夫編『朝倉日本語講座3 文法と意味 I』 朝倉書店、1983 年、2 頁)"

と述べ、郡司は、

"このような再帰的な文の構成は生成文法の誕生に先んじており、時枝の先見性がわかる。(郡司隆男「機械翻訳と言語理論」野村浩郷・田中穂積編『機械翻訳』共立出版、1988 年、59 頁)"、"「辞」が陳述の機能をになって文の構成素をまとめていくという考え方は、句構造が主辞（主要部）を中心にして展開されるという最近の X' 理論の考え方と対応しており、時枝の理論は国文法における X' 理論といえる。時枝は、このような文の再帰的な構成を生成主法の誕生に先んじて考えていたのである。(郡司隆男「文法」人工知能学会編『人工知能ハンドブック III 自然言語編 1 章』オーム社、1990 年、213 頁)"

と賛する。そして時枝文法の実用性は特に機械翻訳システム開発の世界において認められている。そこでは、英文の構造を解析するのに有利なチョムスキーの生成文法やフィルモアの格文法と並んで、日本語の文構造解析には、時枝文法の入子型構造の原理が適用されることが多い。

11) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941 年、60-61 頁。

12) 同書、63-64 頁。

13) 同書、85-87 頁。

14) 同書、139-141 頁。

15) 時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店、1956 年、6-14 頁。

16) 時枝文法は、それまで日本語の中心的文法理論であったソシュールに範を取る橋本文法に抗する形で打ち立てられた文法理論である。そして時枝は、『国語学原論 続篇』(岩波書店、1956 年) において、橋本進吉の『国語学研究法』を引き合いに出し、その研究姿勢がソシュールの学説を踏襲したものである点を指摘しながら、当時の言語学界の研究姿勢と照らし合わせて次のように述べる。

"ソシュール言語学を例にとるならば、伝達は、資材的言語ラングの運用である。言語学の対象は、ラングの運用の事実即ち言語活動ランガージュではなくして、伝達以前の資材的言語ラングであり、ラングの性質法則を研究するのが言語学の任務であるとしたのである。このような言語学において、伝達ということは勿論、表現ということすら、問題にされないのは当然である。[中略]

以上のような説を承けて、橋本進吉博士は、伝達の事実を、次のように説明された。[中略] 右（ここでは橋本進吉の論を指す）は、正に、ソシュール理論に基づく伝達論である。引用文中に言われている言語表象とは、ソシュール学説に言うところのラングに相当するものであり、それは、同一社会の成員においては同じであるとする。それが、表現理解の道具として用いられて、伝達が成立するのである。右の解説によっても知られるように、言語の中心、または本体をなすものは、言語表象、或いはラングであって、その運用は、言語学の問うところではなく、従って、伝達の事実が、言語学の正面の課題になり得なかったことを知るのである。(時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店、1956 年、23-25 頁)"

17) 服部四郎「ソシュールの langue と言語過程説」日本言語学会編『言語研究』第 32 号、三省堂、

1957 年、5-10 頁による。

18) 篠沢秀夫「言語活動の学の実存的基盤」『現代思想』11 月号、青土社、1973 年、208-209 頁。

19) 丸山圭三郎は、リードランジェらのノートの記述をまとめて、次の様にラングの解釈を施す。

"ラングはすぐれて社会的なものである。いかなる事象も、その出発点はどうあれ、それが万人の物となるまでは言語的には存在しない。[中略] ラングを記号学的制度の中に位置させねばならない。ラングはこの科学の主要な部門を占めることになろう。何故ならラングはその一般的モデルとなるであろうから。(丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981 年、267-268 頁)"

一方 Gadet (Gadet, Francois.Saussure, une science de la langue.PUF, Paris. 1987 年、79-80 頁 [立川健二訳『ソシュール言語学入門』新曜社、1995 年、122-125 頁]) は、ソシュール自身が唱えたソシュール学説の本来の姿勢をラングよりもパロールにあると指摘する。この指摘に従えば、ソシュールがパロールの検討から出発して、そこからラングとパロールの対立の図式が現われたことになる。そうすると、ラングとパロールの対立から始まる *Cours* の記述そのものが、ソシュール本来の考えとは矛盾し、逆であることが分かる。しかも、言語学の研究対象としてラングの優位性を説く部分が、ソシュール自身の手によるものではなく、全て編者であるセシュエとバイイによるものであることが明らかになった現在、果たして時枝とソシュールの言語研究の姿勢に決定的な違いがあるのかさえ疑わしくなってくる。時枝学説とソシュール学説の出発点の類似点に対して、前田英樹は次の様に述べる。

"時枝が言う「過程」とソシュールの「現象」の間には、結局どんな相違があるのか。素材－概念－聴覚映像へと至る「過程」において、主体が果たす役割は、時枝にとっては「個物」の概念的な「変形作用」にある。[中略] ソシュールにとっては、言語の外にこのような「個物」としての素材は存在しない。[中略]「過程」と「現象」の間には、言語経験に関する最も根源的な見解の相違があった。前者のなかには、言語主体による意識的で能動的な「加工変形」の活動があり、後者のなかには、語る主体が自己の内部に生じさせる差異そのものがある。たしかに時枝とソシュールは、いかなる分析によっても対象化されることのない言語とは何かを知ろうとし、共にその本質を語る主体の意識活動のなかに送り返そうとした。しかし、ただソシュールのみがさらに、いかなる方法、いかなる意識によっても対象化されることのない言語とは何かを知ろうとし、その本質を究極的な差異の観念に送り返そうとしたのである。(前田英樹「ソシュールと "言語過程説"」『月刊 言語』1978 年 3 月号、大修館書店、1978 年、54-55 頁)"

また Culler (Culler, Jonathan. *Ferdinand de Saussure.* Fontana, Collins. 1976 年、132 頁 [川本茂雄訳『ソシュール』岩波現代選書、1978 年、166 頁]) は、差異的価値にこそソシュール学説の出発点があると説く。

20) 小林英夫「日本におけるソシュールの影響」『月刊 言語』1978 年 3 月号、大修館書店、1978 年、48-49 頁。

21) ここでの磯谷と同様の指摘は、大橋保夫「ソシュールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討(下) －合理主義のラングと経験主義のラング」『みすず』第 15 巻、第 9 号、みすず書房、1973 年、17-18 頁や丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波書店、1983 年、112-113 頁においても見られる。

22) *Cours*、1916 年、311-315 頁。

23) *Cours*、1916 年、25-33 頁。

24) 丸山圭三郎「ソシュールにおける体系と概念と二つの〈構造〉」『理想』第 456 号、理想社、1971 年、31 頁。

25) 小林英夫「翻訳の問題」『小林英夫著作集 3 言語学論集 3』、みすず書房、1977 年、409-410 頁。

26) *Cours*、1916 年、161 頁。

27) 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972 年、163 頁。

28) 丸山圭三郎「ソシュール・その虚像と実像」『現代思想 特集:ソシュール』第 8 巻、第 12 号、青土社、1980 年、85 頁。

29) 服部四郎・川本茂雄・柴田武編『日本の言語学』大修館書店、1979 年、55 頁。

30) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981 年、95 頁。

31) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941 年、7 頁。

32) Humboldt, Wilhelm.『ÜBER DIE VERSCHIEDDENHEIT DES MENSCHLICHEN SPRACHBAUES UND IHREN EINFLUSS AUF DIE GEISTIGE ENTWICKELUNG DESMENSCHENGESCHLECHTS』Berlin. 1836 年、LV-LV 頁。

33) 亀山健吉訳『言語と精神』法政大学出版局、1984 年、70 頁。

34) 時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店、1956 年、6 頁。

35) Jespersen, Otto. *The Philosophy of Grammar.* George Allen & Unwin, London. 1924 年、2 頁。

36) 半田一郎訳『文法の原理』岩波書店、1958 年、1 頁。

37) 時枝は己の学説の基本姿勢を、次のように説く。

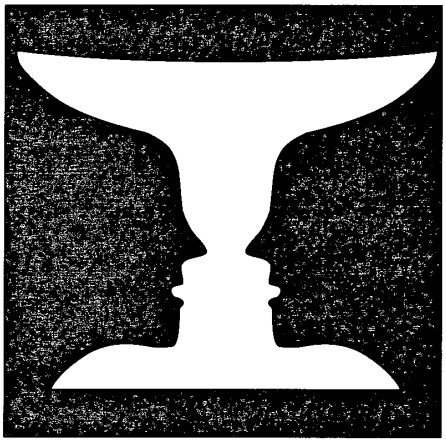
> "言語を表現過程の一形式であるとする言語本質観の理論を、ここに言語過程説と名付けるならば、言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するものであって、言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである。(時枝誠記.『国語学原論』岩波書店、1941 年、7 頁)"

時枝のこうした言語研究に対する姿勢は、昔から様々な形で展開されてきた言語研究の姿勢とその方向性を決して異にするものではない。例えば、約一世紀以上前の言語研究の黎明期にあって、すでに Humboldt (『ÜBER DIE VERSCHIEDDENHEIT DES MENSCHLICHEN SPRACHBAUES UND IHREN EINFLUSS AUF DIE GEISTIGE ENTWICKELUNG DESMENSCHENGESCHLECHTS』Berlin. 1836 年、LV-LVII 頁) や Jespersen (*The Philosophy of Grammar.* George Allen & Unwin, London. 1924 年、2 頁) の言葉にも、時枝の言語過程説での中心的主張と同様の提言は見られる。また、Firth (*Papers in Linguistics 1934-1951.* London: Oxford University Press. 1957 年) やHalliday (*Explorations in the Functions of Language.* London: Edward Arnold. 1973 年) 等のロンドン学派の機能主義的な言語学者達は、古くから "行動としての言語" を追及してきた。更にアメリカ構造主義言語学に目を移しても、Pike (*Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior.* Summer Institute of Linguistics. 1955 年 ならびに *Axioms and Procedures for Reconstructions in Comparative Linguistics.* Summer Institute of Linguistics. 1957 年) に見られる言語研究に対する姿勢は、時枝のそれと通じるものがある。

38) 認知言語学は、ゲシュタルト心理学における中心的主張である、「全体は部分の総和以上のもので

ある」という考えを基盤に置く。これは、人間の認識は、部分を知覚している場合であっても、常にその全体を前提としているものであり、各部分、各構成要素はその全体の構成の中にどのように位置付けられるかによって規定されるということである。そして認知言語学における考え方の基礎を成すものに「Figure と Ground の分化 (Figure-Ground Segregation)」という現象がある。これは、我々が物や出来事を視覚によって解釈する場合、客観的には同一現象と捉えられることでも、その視点の採り方によって異なった解釈を生み出す場合があるという現象を表わしている。この典型的な例が次の図 1 の、視点による絵の変化をもたらす「Figure-Ground の反転図」である。これは、我々の視覚の中に二種類の異質な領域が同時に存在する場合、いずれか一方が強く浮き上がり、もう一方はその周囲となる空間のように沈み込んでしまう現象を提示している。ゲシュタルト心理学の術語を用いれば、この強く浮かび上がる方を Figure（図）、周囲の空間となって沈み込む方を Ground（地）として区別する。ここでは白い盃の方が強く見えたり、黒い二人の横顔の方が強く見えたりする。これは、客観的な外部世界の対象としては同じ図形であっても、どの部分を図とし、どの部分を地とするかによって捉え方が異なってくることを示唆している。この例が示していることは、知覚には解釈が関わってくるということであり、どちらに注目するかという知覚者の主体的な働きかけにより、同じ図形の解釈が変わり得るということである。そしてこの Figure と Ground の反転図の認識こそは、その具体的現象である。ある環境において、どちらが図となり、地となるかは主体的条件によっても、刺激布置の条件によっても規定され得る。現実生活における知覚では、その時々の欲求や態度、過去の経験等によって、どちらを図として認識されやすくなるかが異なってくる。そして注目すべきは、時枝自身が、すでにこの図を用いて自らの言語過程説を説明付けている点である。時枝はそこで、この図を基に、自らの言語過程説における、特に詞・辞の区別の揺れを次のように説明付けている。

図 1　ルビンの盃



“要するに、語は、個々の表現を基にして、それぞれ、別個にその語性が判定されなければならないということになるのである。［中略］この理論を立証するために、心理学で用いられるルビンの視知覚の図形 E.Rubin: Visuell wahrgenommne Figure を借用しようと思う。私は、ここでは、この図形が心理学で使用される本来の意味とは、別の意味で使用することになるかも知れないのである。この図形の中心を凝視していると、盃の部分が、図形として前面に張出し、二つの顔は、背景になっているように知覚される。次の瞬間に、今度は、二つの顔が、図形として前面に張出し、盃がその背景になる。このような交替が繰返される。ここで知り得ることは、（一）初めの図から次の図への交替は、突如として行われるので、図形より背景への転換には連続性はない。（二）一つが図形として知覚される時は、他の図形は全く意味を失う。二つの図形が、同時に成立することはない。（三）盃が図形になる時と、顔が図形になる時とは、それぞれ別個の図として扱われなければならない。以上、三つの事柄であるが、ここで重要なのは（三）である。［中略］一つの図形が、二つの意味を持っていると考え

るのは、ソシュール的立場であり、一語に詞的なものと辞的なものとが共存すると考える立場である。凝視の態度によって出来る図形を、それぞれ別個の図形とするのは、図形は、凝視者を離れて本来あるものでなく、凝視者によって作り出されるとするもので、言語過程説における詞辞論の立場である。(時枝誠記「詞と辞の連続・非連続の問題」国語学会編『国語学』第19号、武蔵野書院、1954年、13-15頁)"

この知覚の分化という考え方は、認知言語学にも引き継がれる。認知言語学では、この知覚の分化という概念を人間の言語認識に当てはめ、言語の意味はその指示対象のみによって決定されるのではなく、認識者たる話者がその対象を如何に理解したかが意味決定の上で重要な役割を果すと考える。ここに見られる時枝の指摘は、部分的に認知言語学の原理に通ずるものであり、その先見性と共に言語現象の解明に対して、すでに半世紀近くも前に、人間の認知構造にその解決を求めた着眼点に対して驚嘆の念を禁じ得ない。

39) 時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店、1956年、6頁。

追記

本論文の執筆に当って、アジア文化研究所所長、ウィリアム・スティール教授より有益なアドバイスと共に、*Japanese Thought in the Tokugawa Period 1600-1868*（徳川思想史研究）の貸与を受けた。また、本学大学院比較文化研究科の飛田良文教授には、国語学における文法理論の流れや問題点について御教示頂いた。スティール、飛田両教授の御厚意に対して、ここに記して深謝申し上げる。

引用文中の旧字体は、全て新字体に改めた。また、Saussureの日本語表記も時代によって、"ソッスュール"、"ソッシュール"、"ソスュール"、"ソシュール"と異なるが、本稿では全て"ソシュール"で統一した。更に、引用文中で"右は"となっているのは、原典では原文が縦書きであるためである。

なお、本論文は、平成9年度から平成12年度まで、日本学術振興会特別研究員研究奨励金と、文部省の特別研究員科学研究費の助成を受けた筆者の博士論文における個別の問題点に加筆を施したものである。